

「安息日論争（2）」

2014年07月24日

マルコによる福音書3章1節～6節。「イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは手の萎えた人に、『真ん中に立ちなさい』と言われた。そして人々にこう言われた。『安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。』彼らは黙っていた。そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、『手を伸ばしなさい』と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。」

全ての労働が禁止された安息日に、主イエスは「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」と問いかけ、手の萎えた人に「手を伸ばしなさい」と言われた。彼の手はいやされ、元通りになった。律法違反を目撃したファリサイ派の人々は、領主ヘロデの家臣たち・ヘロデ派の人々と結託し、主イエスの殺害を相談し始めた。

安息日の労働禁止の戒めはモーセの十戒の第四戒である。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」安息日は、主が六日間の天地創造の労働を終えて休まれた、聖別された日である。この日には、神を礼拝し、いかなる仕事もしてはならないと規定している。

商家の丁稚は「藪入り」が年に一日だけの休みであった。農家の人々は「正月三日、盆二日」と年に五日の休みであった。勤勉に働くことが美德であり、貧しさから抜け出る道でもあった。イスラエルの民は荒れ野を流浪し、カナン定着後も貧しかったに違いない。それでも、安息日は神を崇め、仕事を休む日とした。過労死が起こっている現代、安息日がいかに、意味深い戒めであるかが分かる。しかも、この戒めは、奴隷、家畜、寄留者にも及んだ。生ける者への深い愛情が込められている。この戒めは、バビロン捕囚時代に定着したと言われている。捕囚されたイスラエル人は奴隷として、年中無休であった。彼らは自分たちの宗教的戒めを盾にして、安息日の休みを主張し、実施していった。安息日に働かない彼らを兵役につかせることもできない。兵役免除も勝ち取っていった。安息日の戒めは、神を礼拝し、自分の立っている位置を確認し、歩むべき方向を見定める人間を回復する戒めであった。ところが主イエスの時代、弱者を守り生かす戒めが、彼らを差別、抑圧する道具になり、権力者に都合のいい管理体制を作り出していたのである。

私たちの間で、法が人を苦しめ、不幸に追い込んでいく逆転が起こっていないか。「国旗・国歌法」が制定された時、この法による「強制」はないと言っていた。ところが、学校の入学式や卒業式で「君が代」斉唱が強制されている。アジア太平洋戦争で戦争遂行の精神的支柱になった「君が代」は歌えないという教師たちを処罰し、減給措置を取っている。法が権力者によって、国民を管理し、支配する道具に用いられてはならない。